



# 狐の嫁入り



川崎ゆきお

朝から体調のよくない竹田は、普段の半分ほどのスピードで朝食を済ませた。暑さで食欲がないのか、体調の悪さで食が進まないのかは分からない。この場合、暑さのせいにするのが無難だ。体調は自分の意志では何ともならない。むしろ意識すると病気になるほどだ。

何とか朝食を食べ、テレビを見ていると、室内が暗くなった。目眩ではない。陽射しが消え、逆に暗くなり、遠雷が聞こえ、その後一気に凄い音がした。雨だ。

夕立ではなく朝立ちだ。

水冷効果で暑さが和らぐと同時に、空気まで違っている。それまで悪かった体調が戻ってきた。不安定な空模様が体調に影響を与えたのだろうか、雨と共に憑き物が落ちたように、楽になった。

元気を回復した竹田はテンションが上がった。朝食で用意していたおにぎり二つのうち、残していた一つも平らげた。

そして、そのテンションは、一種の軽さを伴う。体が軽くなり、気持ちも軽やかになった。そのため、部屋でテレビを見ているのはもったいないような気がした。逆に息が詰まるのだ。

竹田はアクティブになった。

それに合わすかのように雨もやんだ。

竹田は体を動かしたいと思い、自転車で外に飛び出した。

路面は濡れており、木の葉からは雨がまだぽつぽつ落ちている。たまり水が日で反射し、雨宿り中の雀も、チュンチュン鳴きながら飛んでいる。

風景が一変している。明るく眩しい。それでいて暑くはない。

竹田はそのまま目的もなく、自転車を走らせる。風景を見ているだけで満足なのだ。だが、いつもとは違う。何となく違う。

かっ陽射しが照りつける。暑くはない。

ここからは、何だったのかが竹田にもよく分からない。ぽつりぽつりとまた雨が降り出したのだ。先ほどの雨脚に比べ、柔らかだ。

竹田は意識した。

出そうなのだ。

そう思いながら前方を見ていると、やはり出る物が出た。

狐の嫁入り。

竹田は歩道を走っている。狐の行列は車道のど真ん中に行く。行き交う車と重なっている。同じ空間内にはいないのだ。

「これが狐の嫁入りか。初めて見た」

馬に乗った花嫁、花嫁道具を運ぶ荷駄。羽織袴の縁者。いずれも、人型だが、顔だけは狐なのだ。

晴れているのに雨。それは何となく欺されたような気がする。雨なら、曇っていても良さそうなものだ。晴れだと思わせて実は雨。しかし、日が出ているのに雨では、絵が違う。

そういう気象的な妙な組み合わせの時、魔が開くのだろうか。

「しかし、なぜ狐なんだ。嫁入り行列なのだ」

ぱらぱら雨がやむと、白っぽいその行列も徐々に消えていった。  
竹田はそれを本当に見たのかどうか、自分でも疑わしい。

了